The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Sue Blundell, Margaret Williamson (eds.), The Sacred and the Feminine in Ancient Greece / 安原義仁著 『イギリス大学史ー中世から現代ー』 / Andrea Merlotti, Vita quotidiana alla corte dei Savaia: 1663-1831 / 弓削尚子著 『はじめての西洋ジェンダー史 : 家族史からグローバル・ヒストリーまで』
Author(s)	伊丹, 千尋; 大畑, 直也; 金田, 彩 他
Citation	パブリック・ヒストリー. 2023, 20, p. 59-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91231
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Sue Blundell, Margaret Williamson (eds.)
The Sacred and the Feminine in Ancient Greece

Routledge, 1998, 192pp.,
ISBN 978–0–0415126632

本書の編者であるS. ブランデルは古代ギリシア・ローマの女性史、とりわけ演劇や絵画における女性の表現に関する研究者である。1995年には *Women in Classical Athens*, British Museum Press を出版している。共同編者のM. ウィリアムソンは古典文学の研究者であり、主にサッフォーの研究を行っている。専門の異なる2人の研究者が、この論文集では、古代ギリシアの女性と宗教の関係に焦点を当て、一般の女性や半女神、女神などがどのような社会的役割を果たしていたのかを考察する。「神格と崇拝者」、「崇拝の対象」、「儀礼とジェンダー」の3つの観点から論文を集めている。特に当時の女性が参加した宗教的な儀式を通した社会とのかかわりを重要視している。全体の構成は以下のようになっている。

第1章　はじめに
第1部　神々と崇拝者
第2章　ヘラの結婚
　　—神話と儀礼—
第3章　アルテミスを飼いならす
第2部　崇拝の対象物
第4章　結婚と乙女
　　—パルテノン神殿における叙述—
第5章　年老いて生まれるか、
　　若いときがないか？
　　—女性性・幼少期・古代ギリシアの
　　女神たち—
第6章　半女神の性質
第3部　儀礼とジェンダー
第7章　死が彼女には似合う
　　—ジェンダーとアテナイの死の儀礼—
第8章　ディオニュソスの鏡
第4部　史料と解釈者
第9章　テスモフォリア祭とハロア祭
　　—神話・自然・秘儀—

本書は8本の論文から構成されており、4部に分けられている。ブランデルとウィリアムソンによる序章を受け、第1部「神格と崇拝者」ではヘラとアルテミスが取り上げられ、女神たちと女性たちの密接な関係が分析される。I. クラークによる第2章では、女神のヘラの司る婚姻儀礼が考察される。アッティカ、オリンピア、プラタイアの3つの地域のヘラを祀る儀式が紹介される。それぞれの儀式で「結婚」、「新婦と妻たちの守護者」、「政治的・文化的な神」という全く異なったヘラの側面が見て取れることから、ヘラと結婚に関する神話と儀式が様々な方法で位置づけられると分析される。それにより、女神の多面性を確認し、ヘラの信仰と女性たちとの深いかかわりを明らかにしている。

S. コールによる第3章では、若い女性そのものと女性たちの成長を司る女神アルテミスが取り上げられる。コールは、アルテミスの聖域が地理的な境界線に位置していたことを指摘し、都市を守る存在とされていたことを確認する。聖域は、境界での争いの際には避難所としての役割も果たしており、傷つきやすい女性と都市を守っていたと考えられる。一方で、多くの神話の中で、アルテミスに仕える女神官が純潔を失うなど、アルテミスの怒りに触れると様々な災いが訪れる。女神がもたらす災いから女性たちを守るために祭儀が行われた。さらに、祭儀には、社会の再生産を促す意味もあった。聖域のレリーフには、母の腕に抱かれた幼児がアルテミスに対面する様子が描かれており、世代の循環と再生産という祭儀の最も重要な目的を表している。

第1部で登場する女神は、妻や新婦、未婚の女性の役割を与えられ、人間の女性のように表現される。実際に儀式や神話を分析すると、女神たちと人間の女性たちの違いは明確である。しかし、女神たちの司る領域の多面性は、当時の女性たちの役割が一面的ではなかったことを示唆している。

第2部「崇拝の対象」では、ギリシア神話と儀式のなかで信仰の対象となった物と女性性・女性との関連が複数の視角から考察される。ブランデルによる第4章は、パルテノン神殿の視覚的な構造から、アテナ女神の社会的な立ち位置を分析する。パルテノン神殿は若い女性たちが儀式を行う場所であったため、その彫刻には当時の女性たちの社会的役割が示されていた。神殿のフリーズには、神話の中から、男性の優位性と結婚の重要性を伝える場面が描かれる。しかし、神殿内部のアテナ女神像は処女戦士の姿をしており、それは結婚と正反対の女性性を表現している。著者は、アテナ女神はアテナイの男性を尊重しながらも、結婚のつながりが重要であるというポリスの考え方に抵抗する二面性を有していたと考察する。

L. ボーモントによる第5章は、神話における男神と女神の誕生と幼少期を論じることで、古代ギリシアで聖なるものと女性的なものがどのように理解されていたのかを分析する。ディオニュソスにみられるように、多くの神話やレリーフで男神の幼少期の様子が描かれている。一方で女神の誕生や幼少期に関する記述はほとんど見られず、アテネやアフロディーテは成人の状態で誕生する。著者以前の研究では、男神と女神の描写の違いは、男性の神話制作者が自身の無力な幼児期と母親の大人の能力を反映したと議論されてきた。しかし、著者は女神の幼少期の描写が少ないのは、女神たちの処女・性の象徴・妻・母などの役割を描写するうえで、成熟した大人の姿が適していたためと考察する。

E. カーンズによる第6章は、第5章までと異なり、人間の女性により近い存在である半女神（ヘロイナイ）をテーマにしている。ギリシア人は、神々、人間とは別に半神という概念を持っており、それは神々に近い特別な力を得た死者とされる。女神、半神、女性の要素を併せ持つのが半女神である。ただし、神話で半女神が半神に従属する描写があるなど、半女神が持つ3要素は、状況によりその濃淡が変化する。半女神に対する信仰の多くは、結婚前の若い女子によって担われ、少女に結婚や母の役割の準備を促した。女性が家の外で社会的な役割ができる領域として、神官があげられ、それらの神官職に初めに就いたのは半女神だとされる場合が多い。他方、カーンズは、政治的活動を行う半女神に言及し、人間の女性との違いを明らかにしている。

女神と半女神の女性性は公的な領域と私的な領域の両方に影響した。半女神の立場が神格に近くなるか人間に近くなるかは、状況によって変化するが、人間の女性よりも制約は少なくなることが指摘される。

第3部「儀礼とジェンダー」では宗教儀式の事例を取り上げ、それらとジェンダーの関係性について考察がなされている。K. ステアーズによる第7章は、アテナイの葬祭儀礼における女性の役割を再評価する。プロテシス（遺体の安置）、エクフォラ（墓地への行列）、墓への訪問は、葬儀における活動として多くの壺絵に残っている。従来の推論では、女性は直接死体に触る役割のため、男性よりも社会的地位が低いとされてきたが、著者は否定する。女性の力が公的・私的領域の両方で必要であったと考察している。また、男女での悲しみの表現方法の違いを指摘する。整然とした男性の行列とは異なり、女性は頭を掻きむしりながら嘆き、棺の周囲で悲嘆に暮れる。女性の嘆きやプロテシスは、私的領域と公的領域の結びつきに関係するだけでなく、女性の通過儀礼の側面も持つ。女性の嘆きは世代を超えて伝承された可能性があり、家族の歴史を構築するために女性は欠かせなかったと考察する。

R. シーフォードによる第8章は、エウリピデスの悲劇の中でディオニュソス教団を拒否するパンテウス王に関する場面の新たな解釈を試みている。それは、王は女装して登場するようにディオニュソスによって説得されるというジェンダーアイデンティティに関する場面である。ディオニュソス教団の秘儀におけるジェンダーの変移とアイデンティティの移行が悲劇と関連付けて考察される。教団の儀式は通過儀礼と考えられており、儀礼前から儀礼完了後に移行する途中のあいまいな精神状態が非常に重要と考えられる。ディオニュソスとの関係におけるパンテウス王の二面性はア

イデンティティが揺れ動いている様子を表していると解釈される。

第3部では、葬送儀礼の分析によって、女性がオイコスだけでなく、ポリスに大きく影響を与えることが明らかになった。第8章ではジェンダーに着目し、アイデンティティが崩壊することによる通過儀礼が考察され、新たな解釈が示された。

第4部「史料と解釈者」ではN. ロウがギリシア全土で行われていた女性だけの秘儀であるテスモフォリア祭を取り上げている。従来の解釈では、祭儀は非常に古く、豊穣のためのものであると考えられてきた。それに加え、本章では、ルキアノスの『ヘタイラの対話』を修辞学的な方法で考察している。テスモフォリア祭のように女性のみの秘儀は、男性のルキアノスが帰属意識を持つことは困難である。著者は、ルキアノスが女性だけの祭りを探る理由や方法、情報を得てからどのようなプロセスで信仰を解釈したのかを議論する必要があると指摘する。また、現代の研究者たちが史料よりも自分たちの解釈を優先して女性たちの信仰を読み取っており、事実を知るための純粋な史料として使えなくなることを危惧している。

第4部は修辞学的なアプローチが用いられていることが特徴的である。テスモフォリア祭の記述から儀式に対する女性と男性の間での解釈の違いについて明らかにしている。さらに、研究者たちによる史料の解釈について考察されている。

本書では「神格と崇拝者」「崇拝の対象」「儀礼とジェンダー」という大きな3つのテーマに沿って論文がまとめられている。女性と宗教の関係が多様な事例や文学作品、神話や図像学的な観点などのあらゆる角度から考察される。本書の特筆すべき点は、儀式や神話の中の女神・半女神の扱い、女性たちの儀式への参加から、女性性がオイコスだけではなく、ポリスにとっても必要であったことが明らかにされていることである。女性がどのように宗教的な領域で活躍し、公的な空間と私的な空間の両方において、なくてはならない存在であったかということが様々な研究から明らかにされた。

その中でも特に、第7章で扱われた葬送儀礼に関する女性の役割の分析は、女性の社会的立場と宗教参加の意味を考察するうえで重要である。葬儀は公的な領域と私的な領域が区別され、男女の役割の違いがはっきりと表れている。しかし、女性の影響力は私的空間に留まるものでなく、女性の宗教儀式への参加が社会的にも重要であったと考察する。これらのことから、第7章を中心に近年の市民権研究やジェンダー史研究への影響を指摘する。

女性の葬送儀礼の参加は、家庭的、社会的に必要不可欠だった。葬儀令では女性の行動などが制限されていたことから、ポリスにとって葬儀での女性の役割の影響が大きかったことが分かる。他方で女性が正しく適切に儀式を遂行することは、オイコスや親族集団にとっても有益であった。以上のことから、葬送儀礼の女性の役割の分析によって女性の社会的な立場を再考できると考える。

第7章の著者であるK. ステアーズは、古代ギリシアの葬送儀礼と死の価値観の研究を踏まえ、葬儀における女性の役割を説明し、分析している。そのうえで、葬送儀礼における性別の役割の違いは、女性が男性に従属していたことを示すのではないと主張する。男性の領域と女性の領域が区別されていただけであり、本論文の著者は女性がオイコスに閉じ込められていたという悲観的な従来の解釈を否定する。女性は家の中の儀式を正しく行う責任があったために、オイコスに留まっていたと主張する。また、著者は、結婚・出産の儀式と葬送儀礼を比較する。それらの儀式でも男性が公的な領域では主導している。

さらに、葬送儀礼における「穢れ」の観点において本論文の著者は、R. パーカーやC. ハブロックが提唱する従来の仮説を否定する。パーカーらによれば、死者と物理的・血縁的に近くにいた者は穢れている。従来の考えでは、女性が葬送儀式に参加できた理由は、女性は潜在的に穢れており、穢れの対象である遺体を扱うのに適していたからであるとされた。それは、女性が従属的に捉えられている。しかし、男性にも棺を運ぶなどの役割

があり、女性の受けた穢れとどのように違いがあるのかは分かっていない。葬送儀礼での男女の役割の違いは、穢れによる役割の差別ではなく、性別で活躍する領域が異なるためと考察される。葬儀の儀式でみられる遺体の処理を行う女性の役割は、女性が私的領域における儀式の監督と遂行を正しくできる力があると示している。儀礼への参加は、女性個人がオイコスだけではなく、集団やポリスの一員としての地位を表現し、高めるのに役立っていたと著者は主張する。

近年ではJ. ブロックが「市民」である定義として宗教的な儀式への参加が重要であったと指摘している(1)。このような宗教的な領域が市民権にとって重要であったという分析から、女性も市民として含まれるようになったと考察している。女性の宗教儀礼の参加は、通過儀礼としての役割が大きかった。そのため、女性のライフステージに合わせて女性と女神たち、半女神との関係性や宗教儀式も変化した。それに伴い、宗教儀式における女性の役割も変化し、社会とのつながりが強まった。女性の宗教参加は通過儀礼としてだけではなく、社会の再生産や世代の循環を促す目的があった。宗教儀式への参加を通じて、女性たちは社会に対して存在感を示すことができた。本論文集は、社会における女性の立場を理解するために、宗教的儀礼への参加に着目することを促している。

註

(1) Josine, Block, *Citizenship in Classical Athens*, Cambridge University Press, 2017.

（伊丹千尋）

安原義仁
『イギリス大学史
―中世から現代―』

昭和堂、2021年、527頁、
ISBN 978–4–8122–2030–6

本書は、イギリス高等教育の通史である。著者の安原義仁は近現代イギリス大学史を専門として、特に学位制度に関する研究を行っている。日本の大学史研究における代表的な研究者の一人である。

著者は、イギリスの大学はいかなる歴史的変遷を経て、どのような個性や独自性を形成していったのかという問いを立てる。本書はその大まかな見取り図を描こうとしたものである。著者によれば、イギリス大学史の研究蓄積は豊富である。しかし、研究の専門化・細分化・精緻化により、その独創性が競われるなかで、個別研究の成果をつなぐ通史は敬遠されがちで、スタンダードな通史が欠如している。そこで、本書ではまずは基本的事実を通説に従って叙述している。その際、本書が通史であることを踏まえ、オックスブリッジ（オックスフォードとケンブリッジ）以外の大学にも目配りすること、歴史と現代の連続性を示すことの2点に留意したと著者は述べている。

本書の構成は、以下のようになっている。

はじめに―旅立ちにあたって―
第1章　オックスフォード大学と
　　ケンブリッジ大学の起源
第2章　ルネサンス・宗教改革と大学
　　―学寮制大学の成立―
第3章　学寮制大学における
　　全学の役割・機能
第4章　市民革命期の大学
　　―政治と戦争の波間で―
第5章　学寮の運営と生活・教育の諸相
第6章　スコットランド、アイルランド、
　　ウェールズの大学
第7章　沈滞・低迷する大学
第8章　オックスブリッジの改革と変容
第9章　再生オックスブリッジの新たな出発
第10章　ロンドン大学の成立と発展
第11章　市民大学の誕生と勃興
第12章　戦間期高等教育をめぐる状況
第13章　戦後高等教育の拡張と
　　大学の革新・実験
第14章　現代の高等教育改革

－大学、国家、市場－

あとがき －旅を終えて－

では、本書の内容を時代ごとに大きく3つの部分に分けてみていこう。

第1章から第6章までは、オックスブリッジ両大学の起源から近世にかけてまでを扱っている。著者はまず、イギリス大学史を理解するためには、オックスフォード大学に関する正確な知識を有することが重要であると指摘している。また、学位は大学の存立根拠であり、大学固有の機能であるとして、その重要性も併せて指摘している。1214年にオックスフォードは教皇から最初の特権に関する勅許状を得た。これが大学発展の大きな一歩となるが、以後、19世紀まで、オックスブリッジがイングランドの大学教育を独占することになる。テューダー朝の初期には、オックスブリッジは国家に対して特権のさらなる庇護・支援を求め、これに対して国家は多大な支援で応えた。一方でヘンリ8世は、学徒の規律強化、規約・学則の事前認可、人事への介入など、大学の統制を強化した。オックスブリッジの特徴的な制度として、全学（ユニバーシティ）と学寮（カレッジ）がある。大学の管理運営を担う全学は、入学登録を通して学徒の掌握・統制を図っていた。また、学位授与や学則・規約の制定についても全学の権限であった。15世紀以降、全学の建物・施設の整備も進められた。対する学寮は、当初貧困学徒のための慈善奨学施設だったが、教育機関へと性格が変化した。これにより学寮制大学が成立した。エリザベス1世の治世以後、オックスブリッジは1642年まで、国家と教会に従属し奉仕する教育機関という性格を保持していた。しかし、市民革命を経て学徒らは減少し、19世紀初頭まで本格的回復はしなかった。

第7章から第12章までは、近世から近代の大学の発展までが述べられる。ジョージ1世の即位後、大学と政府の関係は緊張緩和へと向かう。同時に教師と学生の間に怠慢・無気力が広まり、大学は沈滞・低迷期に入っていく。18世紀後半になると、試験方式や言語に変化が生じるなど、そうした状況を打破しようとする動きが出てくる。18世紀末からオックスブリッジでは世俗化・国民化といった改革が進められていく。1830年代からは議会主導による大学改革が進められ、そこではドイツの大学やドイツ留学経験者が大きな存在感を示した。ドイツの学問に影響を受けた教師が、大学に変革をもたらした。これらの結果、女子カレッジが創設されて女性へのあらゆる処遇が改善されたほか、地方などにも学びの機会を提供したり、労働者によって教育運動が展開されたりした。また、海外から多くの留学生が流入することになった。そして、19世紀における重要な変革として、ロンドン大学が設立されたことが挙げられる。これにより6世紀にわたって続いていたオックスブリッジによる大学独占体制が打破された。ロンドン大学は女性にすべての学位取得を認めたり、科学学位を創設したりといった先駆的な取り組みを行っていた。さらに、地方都市での高等教育に対する需要の高まりを受け、市民カレッジが誕生した。その歴史的意義として、オックスブリッジによるイングランド高等教育独占体制の打破とその加速、地方の産業発展と高等教育機会の提供などを指摘している。

第12章から第14章では、第一次世界大戦後から現在に至るまでが取り上げられている。20世紀になると、国家による教育・研究体制整備のための支援体制が強化された。また、大学、大学教員、学生のそれぞれの間で協会や連合が結成された。第一次世界大戦により大学は、人的、財政的に大きな損失を被った。第二次世界大戦後の高等教育は、拡張が第一目標とされた。高等教育の需要が拡大していたためで、高等教育への財政支援や学位授与権を持っていなかったユニバーシティ・カレッジの大学昇格などが相次いだ。こうして1960年代に、高等教育はエリート型からマス型へと移行した。現代の高等教育改革の基点は、「サッチャリズム」の高等教育政策である。サッチャー政権による大学や学界への直接介入、人員や補助金の削減、テニュアの撤廃などが行われ、イギリス高等教育に壊滅的な打撃を与えた。また、研究資金の傾斜配分が行われたり、大学の序列化、

教育への市場原理の導入が進んだりした。この過程では多くの評価システムが構築されたが、高等教育機関と評価機関の双方で評価疲れが生じ、双方にとって負担の少ない方向へと舵が切られた。

次に本書の特徴と問題点について指摘したい。

まず、本書の最大の特徴はイギリス高等教育史の通史を叙述している点である。日本における大学史関連の著作は多くないのが現状である。研究蓄積が少ない日本においては、通説の理解が重要で、意義のあることだと考えられる。また、本書は大学史に関連する分野に大学史における成果を提供するという役割を担うこともできる内容になっていると考えられる。

加えて、オックスブリッジに関する叙述が、特に前近代においては中心になっているものの、その叙述に留まらないように著者は注意し、それ以外の高等教育機関や学術的な団体・組織、さらには人物にも目配りをしている。この点もこれまでのイギリス高等教育史の新たな一面を照射しているといえよう。

一方で、地域別にみると、イングランドの高等教育についての叙述に多くの分量が割かれている。他のスコットランド、アイルランド、ウェールズについては、特に前近代においては第6章でしか扱われていない。さらにウェールズに関しては、第6章の第9節でしか取り上げられていない。イングランドとそれ以外の地域で高等教育の発達時期には違いがある。しかし、地域間で叙述に大きな差がある点は、イギリス史ではイングランドの相対化が進められているなかで、その研究潮流から外れているのではないかと評者は考える。

次に、細かい点になるが、第1章で取り上げられていたロンドンの法学院について指摘したい。4つの法学院が存在していたとされ、本書では、法学院での訓練と生活がエリート養成において一定の役割を果たしていた点が取り上げられている。しかし、現在も裁判官や法廷弁護士はすべて、4つの法学院のいずれかに属しているということは述べられていない。本書の狙いの一つが過去と現代のつながりを示すことにあるならば、この点に触れても良かったのではないか。

最後に、評者の関心からさらに1点指摘したい。ドイツとフランスの高等教育制度に対する認識である。19世紀イギリスの高等教育改革は、ドイツとフランスの高等教育制度に大きな影響を受けていたとされる。その中で、本書はドイツとフランスの高等教育制度を同列に捉えているが、このような認識にはやや無理があるように思われる。

フランスの近代高等教育制度の特徴は、教育課程の功利性と実用性を強調して、近代科学・技術の内容を導入したこと、さらに高等教育機関のすべてが国家によって支配されていたことである。また、教育機能は高等教育機関が担い、研究機能は独自の研究機関などによって担われていた。教育と研究はそれぞれ別の体系を取り、相互に独立していたのである。こうした教育と研究の分離という状況は、19世紀中期以降、ドイツの大学の影響を受けるようになるまで続いていたとされる。対するドイツの近代高等教育機関は、ナポレオン戦争での敗北を受け、フランスへの対抗意識と逼迫する諸邦の財政状況のもとで成立した。伝統的な総合大学制度のもと、新しい理念・機能などを導入したことが特徴の一つである。ドイツの大学は「研究と教育の統合」という理念を掲げ、大学の中に初めて研究の機能を導入した。具体的には、各種ゼミナールや研究所の設置などを行ったことが知られている。また、これまで従属的な地位にあった哲学部が、神学、法学、医学と並んで独立した学部として成立した。ベルリン大学の創設に関わったヴィルヘルム・フォン・フンボルトも、フランスのように近代高等教育機関が国家の支配下に置かれ、科学・技術の実用性・功利性を強調するあり方に反対している。そして、ドイツの大学では、国家の利益を満足させ、近代科学の進歩を促す一方で、大学の自立性を維持させようともしていた。このように、フランスとドイツの高等教育には大きな違いがあり、両者を併置することには問題があると評者は考えている。

大学はその起源から政治や宗教などの権力側と協調や対立を繰り返しながら、その歴史を刻んできた。また、社会から大学への要求、国外の大学などからの影響も受けて大学は発展してきた。

大学のみに注目してもそれは「大学の歴史」を語っているとはいいがたく、本書は大学史研究の切り口の多様さをも示しているように思われる。現代の大学をめぐっては、選択と集中や基礎研究の軽視、女性研究者の少なさなどについて、多くの議論が交わされている。本書では、こうした現代・現在につながる問題の起源にあたることにも言及している。そのため、本書は大学史だけでなく、現代の大学を取り巻く問題を考える上でも重要な1冊であると考えられる。

参考文献

黄福涛「フランスとドイツにおける近代高等教育モデルの形成に関する比較的考察：カリキュラムを中心に」『大学研究』第20号、2000年、177–191頁。

今井宏編『世界歴史大系：イギリス史2』山川出版社、1990年。

（大畑直也）

Andrea Merlotti

Vita quotidiana alla corte dei Savaia: 1663–1831

Edizioni del Capricorno, 2021, 160pp.,
ISBN 978–88–7707–604–5

本書のテーマは「サヴォイア宮廷の日常生活」である。ヨーロッパで最も古い家柄の一つであるサヴォイア家は、10世紀末から19世紀半ばにかけて西アルプス境界地域を束ねる複合国家を統治した[(1)]。16世紀にアルプス以北サヴォワ地方の都市シャンベリーからアルプス以南ピエモンテ地方の都市トリノに遷都して以降、イタリア半島におけるサヴォイア宮廷の発展と首都建設が開始される。本書の時代設定は、カルロ・エマヌエレ2世（位1638–75）が母クリスティーヌの死によって権力を掌握する1663年から、カルロ・フェリーチェ（位1821–31）の死によって本家が断絶する1831年までの間であるが、その前の時代や分家であるカリニャーノ家の国王カルロ・アルベルト（位1831–49）の時代にも十分な言及がなされている。

ノルベルト・エリアスが1969年に著した『宮廷社会』は従来の歴史学が軽視してきた旧体制期の「宮廷」にあえて注目し、国王が巧みに利用できる政治的・文化的な装置としてルイ14世治世下のヴェルサイユ宮廷を構造モデルとした。近年ではエリアスによる「ヴェルサイユ神話」は修正され、2017年にはイェルン・ダインダムによる『ウィーンとヴェルサイユ』が宮廷の比較史という画期的な成果を見せている[(2)]。本書が対象とするサヴォイアの宮廷研究は1980年代後半から開始され、宮廷構造、役職者、芸術、建築、宮廷都市など多様な分野で増加している。その殆どがイタリア語になるが，英語の研究ではロバート・オレスコ（2000）がトリノの都市計画や建造物の配置といった空間的な構造に注目することにより宮廷と都市の結びつきを詳細に分析し、日本では北田葉子（2008）が宮廷役職者に関する詳細な論文を発表している[(3)]。

本書は主に宗教的儀式に基づいた宮廷の暦に沿い、宮廷の日常生活における慣習と儀礼を鮮やかに再現している点に特徴がある。サヴォイア宮廷は宮廷職を三分割するブルゴーニュ式の分類法をイタリア半島で唯一保有し、所在地である首都トリノが都市国家としての伝統を持たないなど、他のイタリア宮廷とはやや異なる性質を帯びていた[(4)]。一方、近世ヨーロッパの宮廷に共通する要素も併せ持っており、君主が宮廷の頂点であると同時に規則や慣習に縛られていたこと、他の王室や宮廷と婚姻関係によって結ばれていたことなどが例に挙げられる。

本書の著者アンドレア・メルロッティは近世のサヴォイア史と宮廷研究を先導する歴史学者であり、約150の書籍や論文を発表している。メルロッティの宮廷研究はサヴォイア家による儀式や作法という宮廷の文化的機能に注目したものであるが、その他にもサヴォイア家の王朝としてのアイデンティティに言及した論考も注目に値する。例えば神聖ローマ帝国との文化的紐帯を示した2007年の論文[(5)]では、サヴォイア家がいかに中世からの血統と伝統を重視していたのかが強調さ

れている。本書は彼の宮廷研究の成果を一冊にまとめ、一般読者向けに紹介するものである。注釈が欠如しているが、巻末にはその不足を補う詳細な文献紹介が付されている。

本書において使用されている史料は主に二種類ある。一つは規則や儀式の公的な記録である。サヴォイア宮廷にはダンジョー侯の『ルイ 14 世の宮廷日誌』やサン = シモン公の『回想録』のような宮廷の日常を証言する作品は存在せず，制度的な文書に頼らざるを得ない。その代わり，すべての廷臣の職務を定めた規則や、1632 年から 1848 年にかけて活躍した式部官 maestri di cerimonie が宮廷での主な出来事をそのまま記録した手書きの大冊 registri di cerimonie が残存している。もう一つの史料はトリノや宮廷の訪問者による旅行記である。

本書の構成は以下の通りで、各部はそれぞれ 10 章ごとに分かれている。

イントロダクション
1 部　君主、宮廷、王宮群：
　　時代、場所、王の作法
2 部　首都宮殿の生活
3 部　郊外宮殿の生活
エピローグ

以下、評者の関心に応じていくつかの項目を取り上げながら概観する。

1 部で示されるのはサヴォイア君主の権能と象徴、および宮廷の組織や運営である。サヴォイア君主は 11 世紀前半に神聖ローマ皇帝から伯の称号を授与され、15 世紀前半にはサヴォイア公となる。帝国イタリアに含まれるのは旧イタリア王国の小国家であるが、クライスに属し帝国議会に出席していたのはサヴォイアのみであり、近世ヨーロッパではドイツ諸侯の一人として認識されていた[(6)]。また、神聖ローマ帝国の一部であるというサヴォイア君主制のアイデンティティは君主の神聖性をより強固なものにした。それは宗教的なシンボルに表れている。シャンベリーからトリノへの遷都に伴い移葬された聖骸布は、宮廷儀式の中でも最も注目された聖遺物であり、サヴォイア家はそれを守護する役割を果たしたのである。

1 部 2 章では宮廷の建造物や役職について述べられている。サヴォイア宮廷はブルゴーニュ式の家政 casa、近侍 camera、厩舎 scuderia の三部門編成をとっていた。家政は宮廷全体の運営を、近侍は君主の身の回りの世話を、厩舎は移動や狩猟を担当した。さらに 17 世紀末まで独自の政治的・文化的アイデンティティを形成していたサヴォイア公妃の宮廷や太子のための宮殿など、18 世紀初頭までのトリノには王宮以外にも複数の宮殿が存在した。他の近世ヨーロッパ宮廷と同様に、サヴォイア宮廷もまた社会的流動性を持つ大きな空間であった。高位役職は依然として貴族の特権であるが、宮廷には医者、弁護士、建築家といった専門職から、仕立屋、家具職人といった職人、洗濯屋や犬の世話係といった賃金労働者まで多様な社会階層の人々が出入りしていた。その中にはカルロ・エマヌエーレ 1 世（位 1580–1630）から貴族身分を与えられた床屋と料理人のように、社会的地位の上昇を遂げる者もいた。

2 部では暦に沿って実施された様々な宮廷儀式の事例が紹介されている。元日に行われたハンドキス baciamano の儀式についての記述は非常に興味深い。これはヴィットーリオ・アメデーオ 2 世治世下（位 1714–1730）に新しく導入された神聖ローマ帝国とハプスブルク家特有の儀式である。サヴォイアにおいて元日にハンドキスの儀式を行った最初の痕跡は 1692 年にまで遡る。当初は慣習であったが、1713 年にヴィットーリオ・アメデーオ 2 世がシチリア王に即位して以降、儀式としての発展をみせる。国王カルロ・エマヌエーレ 3 世（位 1730–73）の治世には、王座を囲む手すりがあり儀式の執行上機能的な王妃の儀礼部屋で行うことになった。王は王座の足元に立ち、その右側に王妃、左側に王子たちというように王家全員が手すりで囲まれた空間の中に置かれた。一方、手すりの向こう側には血縁の諸侯たちやハンドキスを義務付けられた人々が立っていた。儀式の発展に伴い、王位継承・結婚式・葬儀など元日だけでなく特に重要な行事の際には厳粛なハンド

キスが行われた。

3部は首都を離れて郊外やアルプス以北の領土で過ごすサヴォイア家の生活について記載されている。5月中旬から12月上旬まで、宮廷はトリノ王宮を離れて郊外にある休暇用の宮殿に移動する。これは各君主が自らの好みに応じて場所や時期を変化させながら常に行ってきた慣習である。郊外の宮殿では狩猟や球技などのスポーツ、祝祭や舞踏会などが日常的に行われ、首都の厳粛な雰囲気から解放される特別な空間を作り出していた。3部1章で紹介される温泉地への移動は、王侯貴族の旅行が後の時代における旅行の大衆化に一役を担っていた事例を示している。現在のイタリア、フランス、スイスにまたがる西アルプス山脈は広大な自然と豊富な水資源に恵まれ、近世ヨーロッパ王侯の夏の避暑地として好まれていた。夏は気候も良く、アルプス以北のサヴォワ地方など他の時期には訪問が困難だった場所への旅行が可能になった。サヴォイアの歴代君主もシャンベリーに好んで足を運んでいた。15世紀から20世紀に至るまで頻繁に行われていた旅行の具体的な目的は「湯治」、つまり療養である。サヴォイア領のあらゆる場所に王侯たちのためのリゾート地が設けられ、18世紀末から19世紀にかけて近代的な温泉の建設工事も進められた。サヴォイア領は19世紀半ばにフランスとイタリアに分断されることになる。しかし、著者が指摘するように、何世紀にもわたる共通の歴史を持つ西アルプス地域はサヴォイア君主やその家族の休暇中の滞在によって避暑地としての基盤が築かれ、19世紀後半には交通網の整備によりアルプス有数のリゾート地として発展するのである。

以上、本書の構成に即して概観してきたが、サヴォイア宮廷とその空間を理解するための膨大な事例とカラー版の多彩な図像資料には圧倒される。サヴォイア君主と家族の肖像画、宮殿、馬車、衛兵、劇場、ゴンドラなど、まさに宮廷生活が目前に再現され、これらの図像資料からもサヴォイア宮廷の汎ヨーロッパ的な性質が見て取れる。特に、表紙に採用されているストゥピニージ宮殿といった狩猟宮殿はサヴォイア家の文化的象徴とも言える。

一方で、改善すべき点と評者が疑問に感じた点もある。一点目は地図の欠如である。本書には数多くの地名や宮殿が登場するため、場所を示す当時の地図が地理や距離の把握に望ましい。西アルプス山脈を挟む広大な領土を統治する複合国家サヴォイアは、他のヨーロッパ諸国にとって獲得を望む土地であると同時に緩衝地帯でもあった。また、首都であるトリノは現在のフランスやスイスとイタリア半島の各地への移動の際には必ず立ち寄る中継地点でもあり、本書でも数多くの旅行者がサヴォイア宮廷に足を運んだことが紹介されている。地図上に宮殿や活動拠点を示すことは、サヴォイア領や首都トリノの地政学上の特質に加え、商人の交易路や旅行者による文化的な交流を理解するのにも有益となったであろう。

二点目は宮廷移動の議論についてである。本書では旧体制期のサヴォイア宮廷が領土の各地へと移動し、トリノ王宮に定着しなかったと指摘されている。しかし、行政官と司法官が首都に留まり、君主の首都への帰還が頻繁に行われていたとも言及されているため、宮廷の移動と定住化のどちらで捉えるべきか疑問が残る。確かに、君主や親族が療養や狩猟を目的として郊外や領土の各地を訪れていた事実もあるが、それは宮廷の移動ではなく君主の旅行として認識するべきではないだろうか。本書では宮廷移動の全体像にやや曖昧さが見受けられる。こうした点を明らかにすることで、一点目に指摘した地政学上の理解に加え、宮廷の移動が領域統治へもたらす効果を明示することが可能となるように思われる。

三点目は都市社会への考察が不十分なことである。本書の導入部分で言及されているように、首都に宮廷の所在地が置かれることは都市の経済的な活性化をもたらす。王侯の奢侈品消費や宮廷の食事など宮廷の存在と都市の経済は密接な関係にある。しかし、本書では宮廷がもたらす首都への社会的・経済的な影響についての情報が不足している。宮殿など建築物を描いた絵画が多数挿入されている一方で、布類や首飾りなどの服飾、蝋燭、寝具やクローゼットなどの家具調度品、食品

や酒類、娯楽品など宮廷生活において使用される物品の図像資料は殆ど見られない。著者は2007年の研究動向論文[7]において，ピエモンテを含むサヴォイア史では経済史・社会史に関する研究が軽視されてきたことを指摘している。従って、その後の研究による成果などが示されていれば、儀式や文化以外の側面で宮廷が都市において果たした役割を描くことが可能になったのではないかと思われる。

近代国民国家という枠組みに留まらないサヴォイアの歴史は、西アルプス一帯の政治、社会、文化の多様で複雑なあり方を我々に示している。1494–1559年のイタリア戦争や1796年のナポレオン侵攻などフランス勢力による支配時期もあるが、広大な領土を長期的に統治した君主の居住する宮廷は領域統治の拠点としての機能だけでなく、文化的な発信地の役目も果たしていた。また、他の諸王朝との婚姻関係は外交的な友好関係だけでなく儀式や慣習の流入にも効果を発揮し、サヴォイア家は様々な文化を巧みに導入することで他のヨーロッパ王朝に匹敵する栄華を誇っていた。日本においてはあまり認識されていないサヴォイア史であるが、宮廷の日常生活が詳細かつ鮮やかに再現されている本書によって，サヴォイア史ならびに近世の宮廷への理解がより深まることが期待される。

註

(1) Bianchi, Paola e Merlotti, Andrea, *Storia degli Stati sabaudi: 1416–1848*, eBook, Brescia: Morcelliana, 2020, prima edizione nel 2017, Introduzione.

(2) J・ダインダム著、大津留厚 、小山啓子 、石井大輔訳『ウィーンとヴェルサイユ：ヨーロッパおけるライバル宮廷、1550−1780』刀水書房、2017年。原著は、Duindam, Jeroen, *Vienna and Versailles, The Courts of Europe's Dynastic Rivals, 1550–1780*, Cambridge University Press, 2003.

(3) Oresko, Robert, 'The Sabaudian Court: 1563–1750', in Adamson, John (ed.), *The Princely Courts of Europe: Ritual, Politics and Culture under the Ancien Régime, 1500–1750*, London: Seven Dials, 2000, pp. 231–253; 北田葉子「近世トリノの宮廷：1560–1630年」『明治大学教養論集』2008年、428号、33–55頁。

(4) 北田葉子「イタリアの宮廷社会」齊藤寛海 、山辺規子、藤内哲也編『イタリア都市社会史入門：12世紀から16世紀まで』昭和堂、2008年、244–262頁。

(5) Merlotti, Andrea, 'I Savoia. Una dinastia europea in Italia', a cura di Barberis, Walter, *I Savoia. I secoli d'oro d'una dinastia europea*, Torino: Einaudi, 2007, pp. 87–133.

(6) 帝国イタリアについては以下を参照。P・H・ウィルスン著、山本文彦訳『神聖ローマ帝国：1495–1806』岩波書店、2005年。原著は、P. H. Wilson, *The Holy Roman Empire 1495–1806* , Hampshire: Palgrave Macmillan, 1999；齊藤寛海編著『イタリア史2：中世・近世（世界歴史大系）』山川出版社、2021年、序章。

(7) Merlotti, Andrea, 'Società e ceti. Le complessità della struttura per ordini nel Piemonte d'Antico Regime' , a cura di Bianchi, Paola, *Il Piemonte in età moderna. Linee storiografiche e prospettive di ricerca* , Torino: Centro Studi Piemontesi, 2007, pp. 137–166.

（金田彩）

弓削尚子
『はじめての西洋ジェンダー史
：家族史からグローバル・ヒストリーまで』

山川出版社、2021年、304頁、
ISBN978–4–634–64095–5

本書は、ドイツ史とジェンダー史を専門とする著者による西洋史をジェンダーの視点から捉える概説書である。タイトルに「はじめての」と書かれているように、本書はジェンダー、かつ西洋史についての基礎的な歴史を提示している。基礎的とはいうものの、ジェンダーというと女性が同義語として捉えられがちであるなか、男性ジェンダーの観点からの歴史にも注目して考察している。冒頭で「本書は、家族史からグローバル・ヒストリーまでの各分野を切り開いてきた多くの歴

史家たちの研究成果に基づく入門書」として、

「ジェンダーの歴史的構築性というものを実感し、理解することができる」（7 頁）と紹介し、読み手の関心を促している。そして、本書を特徴づけるのは、歴史教科書のように、古代から現代までの通史として西洋ジェンダー史を論じていくものではないと明言する点である。

本書は「はじめに」と「むすび」を含む全七章で構成される。各章の概要を紹介する前に、装丁に触れておきたい。近年、電子書籍が普及し、手軽に書籍を入手できるようになった。しかしながら物理的な書籍を手に取る際に、評者は装丁を注視する。まず目を見張るのは美しい装丁である。無論「美しい」というのは主観的な表現だが、装丁は読者が著書を手に取るかどうかに影響を与え、著書の内容を体現するものである。本書は、美しい装丁の白色のカバーにかけられた帯と見返しの色がピンク色となっている。このピンク色もカバーの白色のマットな紙質に調和している。

現代において、ピンクは女性、青は男性というステレオタイプが持たれている[(1)]。この Paoletti（2012）の指摘を踏まえれば、本文のみならず装丁からもジェンダー史を紐解く上では、社会に根ざす女性性を中心とすることが伺える。すなわち、ジェンダー史での議論を重ねれば重ねるほど、ジェンダーは女性性と男性性に対する包括的な視点であるにもかかわらず、女性を中心に扱うものという認識が強化される可能性を指摘できる。

「はじめに」では、著者はイギリスの歴史家 E・H・カーの言葉を冒頭に引用し、その「釣り人」の性別について読者に問う。読者の「無意識のバイアス」に働きかけることで、従来の歴史学が男性によって独占されていたことを気づかせ、今後の展開について惹きつける。

第一章「『古き良き大家族』は幻想——家族史」では、夫婦・親子が愛情で結ばれるものといった家族観は、200 年ほどの歴史しかもっていないと指摘する。貴族は政治的・宗教的思惑で結婚がおこなわれ、夫婦愛を前提としない夫婦関係であった。都市民や農民は結婚相手に労働上のパートナーの役割を求めていた。子どもは社会の下層において、貴重な働き手とされていた。著者は西洋近代社会で規範化された家族モデルが、さまざまな偏見や差別を生み出したことを示し、現代においても過去においても家族のあり方は多様であるとする。家族史研究の発展により近代家族モデルの呪縛を解き放つことができるという展望を述べている。

第二章「女性の歴史が歴史学を変える——女性史」では、歴史において一般の女性が描かれない一方で、マリア・テレジアやマリ＝アントワネットなど「例外的」か「物議をかもす」女性たちは描かれてきたことについて論じている。女性史研究が日記という文字史料や女性像が投影された裁縫箱付きピアノという非文字史料を発掘したことに触れ、方法論という観点からも歴史学全体に意義のある成果をもたらしたとする。

第三章は「女らしさ・男らしさは歴史的変数——ジェンダー史」とされ、女性のみを対象とする研究は女性史の「ゲットー化」を起こしかねないことを指摘する。ジェンダー概念の理論化についてジョーン・スコットの働きに注目しながら、男女二元論ではないジェンダー概念を取り入れた歴史研究へ展開していく。英語圏以外のジェンダー史の成立にも触れられている点が参考になる。

第四章「男女の身体はどう捉えられてきたか——身体史」では、人間の体もまた歴史的に変化することが論じられる。特に身体をめぐる人びとの意識や価値観など、身体をめぐる社会の変化を明らかにしようとすることに着目している。身体史にかかわる解剖図や絵画も挿入され、各時代における身体観の視認性を高めている。

第五章「男はみな強いのか——男性史」では、歴史における女性の可視化を追求した女性史、ジェンダーの視点の重要性を提示したジェンダー史研究の延長上に、男性史が誕生したと述べている。男らしさもつくられたジェンダー規範として、社会、文化、時代によって多様であるとする。カストラートという男性去勢歌手の存在や徴兵制、決闘、同性愛者を例に、男性性の変遷がまとめられている。

第六章「『兵士であること』は『男であること』なのか――『新しい軍事史』」では、軍隊が男性の領域であるとされながらも、男性ジェンダーの観点から分析された研究がなかったことを指摘し、イギリスの歴史家マイケル・ハワードによる「新しい軍事史」を紹介している。さらには、近世の軍隊は男性の戦闘員だけで構成されていたわけではないことを述べている。具体的には「第一は、軍隊がさまざまな女性の生活と就業の場であったこと、第二は、女性が武器をとり、なかには軍功を収めて賞賛さえあびる者までいたこと」（218 頁）が記述されている。この点に、著者が繰り返して述べる「従来の歴史学」と本書との違いを把握できる。

第七章「西洋近代のジェンダーを脱構築する――グローバル・ヒストリー」では、非西洋の側から西洋の歴史学を考察する。そこでは、西洋と非西洋の連関をジェンダー的構造と捉える方法として、絵画が分析される。絵画は植民者の被植民者に対する優越意識や差別の感情を理解するうえでの大きな手がかりである。そのため、非西洋におけるジェンダーの観点から西洋の拡張の歴史を再考すると、性別二元論に回収しきれない、非西洋における「第三の性」にも目を向ける必要があると示した。具体的には、性的越境者としてインド亜大陸の「ヒジュラ」や、アフリカの女性が「息子」や「夫」として生きていくことを公認する地域の存在が紹介されている。これらを通じて「白人の責務」や「文明化の使命」を掲げた植民地支配をジェンダー史的に再考することが可能となるとする。

以上、各章を概観してきた。本書は、ジェンダーを切り口に歴史学の多様な成果を考察した著作である。著者は本書でジェンダー秩序を基盤とする 19 世紀に生まれた近代歴史学が、意識的、無意識的に研究対象として見過ごしてきたテーマや対象を取り上げている。

先行する本書の類書として、ソニア・O・ローズ『ジェンダー史とは何か』[(2)] が、原著から 6 年を経た 2016 年に邦訳されている。ローズの著書は、ジェンダー史の研究者たちがどのようにジェンダー史にアプローチしてきたかについて総括した著作である。また詳細な歴史研究の事例を通して、ジェンダー史が歴史学のなかで周縁化された分野ではなく、主流化とも捉えられるほど、重層的に研究されてきた分野であることを示唆している。一方本書は、著者が大学の教養科目として行った授業をもとにしたというように、現代社会におけるジェンダー課題を歴史的に考察できる具体例が各章で提示されている。授業を受ける若い世代に向き合う著者は、本書を通じて、大学におけるジェンダー史教育のあり方や意義についても再考を促している。

たとえば著者は、旧来の戦争の歴史は、政治家や軍人による戦略や戦術といった戦場の駆け引きと勝敗が中心だったが、男性ジェンダーの観点から兵役を免れたり拒否したり、脱走した兵士たちの「男らしさの歴史」について記述している。また男性の領域とみなされてきた軍隊で、女性であることを隠し、男装して兵士となった女性兵士について紹介している。

なお、2022 年 7 月に『女性兵士という難問：ジェンダーから問う戦争・軍隊の社会学』[(3)] が刊行され、これまで稀であった「戦争と女性」に焦点が当てられていることが思い出される。佐藤（2022）は「軍隊も戦争も、女性たちに依拠することを必ず必要としており、彼女たちの経験から現象を見つめることは、その男性中心性を明らかにするうえで欠かすことのできない作業である」（3 頁）と強調する。

このように本書は最新のテーマについても論じている入門書であり、ジェンダー史の理解を深めることができる良書である。今後のジェンダー史研究には、男女の二元化されたジェンダー規範を越えた視点から論じることが必要になると考察できる。

最後に「西洋ジェンダー史」の初学者である評者から、用語の使用に関して気づいたことを述べたい。オーストラリアの「混血児」や原住民児童の隔離政策について述べる際、「アボリジニ」（277 頁）という呼称を使用している。藤川（2016）によると「アボリジニという単数形は、差別的な

ニュアンスがとりわけ強いという批判があるので使用が避けられています」[4]とある。日本では「アボリジニ」という名称が浸透しているが、「差別的であるという理由から、オーストラリアでは公的な場で用いられなくなっている」[5]とされる。本書が一般読者を想定していることから、補足があると、より深い理解が得られるだろう。

また日常生活では馴染みのない言葉が散見された。たとえば、ソドミー、アグノトロジー等について、解説があると読みやすかった。

このように2点の用語について指摘したが、本書は歴史学の変化をたどりながら、ジェンダーの視点が広く必要とされる背景について考察した、示唆に富む著書である。

むすびにおいて、著者は「ジェンダー史について学び、考えることの醍醐味は、『自分事』として歴史を身近に感じ、ジェンダーの歴史的構築性に敏感な思考力を養うこと」（301頁）と述べている。ジェンダーを人種、民族、階級、セクシュアリティが複合的に交錯する視点で問い直す本書をより多くの人が手に取ってほしい。各章の文末に挙げられている参考文献は、これから西洋史やジェンダー史を専門としたい学生や知見を深めたい読者には有用である。

既に西洋史やジェンダー史に関する書籍が多様であるなか、あらためてジェンダーの脱構築の観点から、歴史のおもしろさを伝えようと試みた本書は、西洋ジェンダー史研究の新しい可能性を拓く一冊となっている。

註

(1)Paoletti, Jo Barraclough, *Pink and Blue: Telling the Boys from the Girls in America*, Indiana University Press, 2012.

(2)Rose, Sonya O., *What Is Gender History?* , Polity, 2010; ローズ , O・ソニア , 長谷川貴彦、兼子歩訳『ジェンダー史とは何か』法政大学出版局、2016年。

(3) 佐藤文香『女性兵士という難問：ジェンダーから問う戦争・軍隊の社会学』慶應義塾大学出版会、2022年。

(4) 藤川隆男『妖獣バニヤップの歴史：オーストラリア先住民と白人侵略者のあいだで』刀水書房、2016年、34–35頁。

(5) 藤川隆男「Aborigine, Aboriginals」藤川隆男編・監修『オーストラリア辞典』<https://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/bun45dict/dict-html/00003_AboriginesAboriginals.html> 2011年、（2022年5月閲覧）。

（杉山暁子）